

日本現代文學
全集
101

武田泰淳
中村眞一郎集

日本現代文學全集
101

武田泰淳
中村真一郎
集

講談社

日本現代文學全集

101

武田泰淳・中村眞一郎集

編集
伊藤 整
龜井勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和39年3月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

4260a

著者 武田泰淳
中村眞一郎

装幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 島田製本株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21
郵便番號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-107011-2253 (2)

(文1)

武田泰淳集 目次

筆 蹟

蝮のすえ	五
異形の者	七
流人島にて	七
ひかりごけ	八
汝の母を！	一五
士魂商才	二二
誰を方舟に残すか	二四
ニセ札つかいの手記	三三
司馬遷	一七

滅亡について	三六
--------	----

作品解説	山本健吉	四六
武田泰淳入門	篠田一士	四三
年 譜		四九
参考文献		四四

中村眞一郎集 目次

筆 蹟

死の影の下に……………三三

回轉木馬……………三二

わが小説觀……………四二

作品解説……………山本健吉 四九

中村眞一郎入門……………篠田一士 四三

年 譜……………四七

参考文献……………四四

武田泰淳集

春風東來忽相
過金樽美酒
生微波

泰淳

蝦のすえ

その一

「生きて行くことは案外むずかしいのかも知れない」

私は物干場のコンクリートの上に枕を置き、それに腰をすえて陽にあたつていた。陽の光の射さぬ裏部屋を出て、毎朝そこで日光浴をした。鶏が二羽、いつも枯れた菜や飯の残りを、その隅でついていた。下の路地では、日本人の品物を買ひあさる中國人の聲が、ののしるようにきこえていた。賣る方の日本人の聲は低く、かつ弱弱しくとまどつていた。そのため買ひ手の聲が、餘計にだけしくおびやかすようにきこえた。遊んでいる日本人の子供の聲だけは、樂しげに元氣よかつた。それが親たちを、かえつてイライラと不安にさせるのだつた。

「ともかく、みんなこうして生きている以上は」私は會元里の家々の屋根の向うに、白々と迫つた映畫館の壁を視力の弱つた目で見つづけていた。壁はギラギラ光り、冬の青空の中に浮び出ている。「戦争で敗けようが、國がなくなろうが、生きていけることはたしかだな」

日本人商店のショウインドウも、いつか青天白日旗や蔣主席夫婦の寫眞を飾り始めた。

「夫婦兩箇頭、五千塊」と賣り歩く老人から、私も一枚、小型の寫眞を買つた。夫婦並んで寫したのが見る見る賣れた。「生きていく

には守護神が必要なのだ」私は中國の巡警が見回りに來た時の用意に、それをノートの間にはさんでおいた。映畫館では、中國の國歌を歌う時、觀客が起立した。私も起立して、孫中山の顔や青天白日旗のひらめきを、おとなしく眺めた。無感覺な人形のように、私は起立し、坐り、映畫が終ると中國の青年男女にもまれながら外へ出た。はげしい抗日映畫で口々に叫び出す觀客のいきおいも、まるでよそごとのように聴いた。私は無表情のときも苦笑するときもあつた。どんな時でも、死なないで生きていられると、そればかり感じた。最初は恥を忍んで生きている氣でいた。だがフト氣づく、恥も何もないのであつた。私の無表情や私の苦笑は、恥も何もなく、只生きているだけの一枚看板であつた。

私は代書業をはじめた。中國語の書類をつくる商賣であつた。依頼者はたえなかつた。この家の主人はブローカーであつた。そのため上海に留十五年間の知人が次々と來た。依頼者はせつぱつまり、かしくまつて相談した。敗けても生活はつづいていく。そう物語るように、彼等は雑多ななやみを持ち込んで來た。

「今さつき強盗に入られて、主人が連れて行かれましたが」と顔面蒼白の老人が駆けこむこともあつた。早く警察へ届を出さねと人命にかかわるのであつた。「今すぐ書いていただかない」とせきたてられ、私は二階の暗い裏部屋へ入る。晝でも電燈をつけ、蜜柑箱の上でカーボンをひろげる。日華辭典たよりに、のろろと仕事をす。そして出來上がると金をもらふ。「二萬元です」と言ひにくそうに言う。まだ儲備券が通用していて、それで煙草四つほどのねだんだつた。人の不幸で金をかせぐ、そんな反省も開業二三日間であつた。私は酒が飲みたかつた。油っこいものが食べたかつた。そのためには事件が起きて、客が來ることが絶対必要であつた。

或者者は明日にも現住所をたちのかねばならなかつた。或者者は集中地區外の荷物を何とか運び入れねばならなかつた。臺灣の家族のもとへ歸るため中國人になりたい男もいた。歸國したい一心で病

氣屈をする徴用された潜水夫もいた。露店を出したいもの、手持商品をコッソリ金にしたいものもいた。朝鮮の記者も來た。盲人も來た。妊婦も來た。金ならいくらでもという商人も、栄養不良でフラフラの病人も來た。私は何でもひきうけ、大膽に書類をこしらえた。無責任に書いた。パスさえすればよかった。日僑管理處の役人を泣き落すような文句をえらび、正々堂々の議論まで並べた。大げさに書き、都合よく書き、しまいは嘘まで書いた。しかし少なくとも、私の書く物は意味が通じた。そのため大部分パスした。依頼者は御禮に來た。そして、いつか私は信用を得つつあつた。代書業に人氣が出たばかりではない。私はたのもしい青年と思われはじめた。

私は金さえもらえばよかった。居留民の利益のためとは露骨でも考えない。そんな私を頼りにする人々をあわれと感じた。これ程無責任、無能力な男が役に立つ人の世が馬鹿々々しかつた。あまりチャチで、あつけなかつた。私は、かつて上海へ来る前も來てからも、よく勉強し、よく働き、よく考えた。その時、私は誰からも信用されなかつた。終戦後、私は勉強もせず、働かず、考えもしなかつた。しかし私は今までかつてない程、價值ある人物と化しつつあつた。私はもはや理想もなく、信念もなく、只生存していた。そういう私こそ、人々には必要とするらしく見えた。私はもつともらしい顔つきがくせになつた。何をもち出されても驚かなかつた。その私に依頼者は身の上の相談をした。中國人の女性を妻とした男は、別れるべきか、夫婦であるべきかを私にたずねた。歸國を前にして戀人のもとへ走らんとする人妻は、その決心を私に打明けた。かくて私は懺悔や告白を聴き入れてやるカソリックの僧侶の立場にまでたち至ることがあつた。

或る朝、私は昨夜残した老酒ツォウユウを飲んでいた。少し酸氣の出たのを茶碗でガブガブ飲み、早く酔がまわるのを待つていた。そして「被銃殺者」という詩を書くつもりだつた。ニュース映畫で見たドイツの戦犯者が銃殺される光景が印象にあざやかだつたからだ。銃聲。

白煙の中で縛られた上半身がグイと前に倒れる。それでしまいだつた。それは實に簡單であつた。そして明々白白であつた。痛快なほど眞實。理窟以外のものがそこに在つた。それが私には氣に入つた。

「えーと。上半身が前へ倒れた！」と。何故倒れたのでしょうか、と。引力の法則によつてか、と」そんな文句を半紙の上に筆太にするしていると、下の主婦が「杉さん、お客さんですよ。先日代書を頼みに見えた若い女のひと」と呼んだ。

「今行くよ」私はよれよれの中山服の上にとどらを着て、下へ降りた。「若い女というと、あの女だな」私は依頼者の一人を思い浮かべた。

夫が病氣で寝ている、三日のうちに立退けと、家屋の所有主である會社がせきたてる、どうすることもできません、嘆願書をこしらえて下さい。先日、その女はそんな用件で私を訪ねた。

代書の客は下の入口のたたきの上に立つ。七八枚、ガラスばりにした屋根から明りをとつた入口は、部屋より明るい。その青白い光の裡にはじめて冬服の彼女が立つた時、私は一種の身ぶるいをした。スラリとした身體つきも、夕暮どきの花のように白い顔も、はずかしそうに可憐にも見え、又あでやかに媚びるようにも見える態度も、私の心を打つた。何か永いこと忘れていたもの、かつて自分が人生の目的を失わぬ頃抱いていた幻が突如出現したかの如くであつた。

「承知しました」私は商賣人らしく、テキパキ要點を聴き取つた。二階へあがり、名文を綴つた。我ながらよく出來たその書類を彼女にわたした。「四萬元ですが」私はニコリともせず、わざと普通の倍額を請求した。私は代書屋であり、すでに抒情を輕蔑し、無關係なことに氣をつかうのは止めにした男であつた。

「それでよろしいんですの？」彼女はピカピカ光る黒革のハンドバッグから紙幣を出して疊の上に置いた。

「先生も大變でいらつしやいますのね。こんなお仕事はじめて」彼女人は人なつこい、大きな目でつつ立つたままの私をあおぎ見た。

「私、先生の詩よく読んでいますわ。主人も先生の詩が好きですの。杉さんどうしたかなつて、よくおうわさしてますわ」彼女はなつかしがるような面持であつた。

「え？」私は全身の血が逆流して来るような屈辱を感じた。代書の料金を受領しようとする私に向つて、よりによつて昔の詩、あの甘つたるい詩のことなど、何故この女は言い出すのだ。よくおうわさしています。何というたまらないことだ。「自治會へ行つてハンをもらつて、それから」などと注意しながら、私は荒々しく紙幣をつかんだ。

丁寧に禮をのべて、黒い扉の向うに彼女の美しい脚が消えると私はドタドタと狭い階段をかけ上がった。目がクラクラして、一段ふみはずして右の足首を痛めたほど私は興奮していた。

その彼女がまた來たのだ。私は酔つていてよかつたと思つた。どうせ終戦後も金を澤山持つて、何不自由しない若奥さんじやないか。私は無愛想に「やあ、どうでした。パスしましたか」とたずねた。

「おかげさまで、管理處の支那憲兵さんがすぐ見に来てくれて、あのまま住めることになりました」

彼女は赤白だんだら模様のセーターを着ていた。そのため白い顔がよけい華やかに見えた。「これ、もらいものですが」と高級な外國煙草を差し出したあと、もじもじして彼女は歸らうとしなかつた。

「先生、今おひまですの。一寸お話ししたいことがあるんですが、聞いていただけますか？」

「何ですか。どうぞ遠慮なく」

「ここじや一寸お話ししにくいんですが」

「じや、部屋へ來ませんか」

私は代書料金の數倍する煙草をかかえ、二階へ上がった。電燈やガスのメーターがとりつけてある以外、三方裸の壁にかこまれた小さな暗い部屋に近々と坐ると、彼女はまるで美麗な動物のように感ぜられた。女の匂い、女のあたたかさ、女の光のようなものが、たちまちそのみすばらしい裏部屋に満ちた。私は汚い毛布をひろげ、自分も坐り、彼女も坐らせた。そして私は又一升びんの老酒を茶碗にあけた。

「お酒のあがれる方はしあわせですのね。何も忘れられて」

彼女の横坐りにした可愛い絹靴下の足が動くたびに、私は壓迫を感じた。何冀と反撥し、意地悪にさえなつた。

「わたしたち恥を忍んで生きてるんですの。とても不幸なんですの。お話しできないくらい」

「不幸ですつて？」私はあからさまに皮肉な口調になつた。

「つらい、はずかしいことばかりなんです」彼女は急に表情を變え、下を向くと肩をふるわせていきなり泣きはじめた。すすり泣く姿が、しゃくな事に又實に美しかつた。しおらしく、なまめかしう、誰だつて同情せずにはいられないほどだつた。だが私は我慢した。泣きたいのはこの女ばかりじやない、泣けたら私だつて毎日でも泣いて見たかつたのだ。

だが彼女が打ち明けた「つらい、はずかしいこと」は、私にとつても、たしかに、つらい、はずかしいことであつた。酒の酔が發しても、その話の胸苦しさは消えなかつた。冷嘲しても無視しても、その内容はねばりついた。

「辛島さん御存知でしょう。わたしの主人、あのひとに使われてたんです。杉さん辛島さんをどう思いますか」

私は軍の宣傳部で有名な、その辛島なる男を、むろん知つていた。顔も見ることがあつた。色白の、デブブリした、立派な男であつた。豪傑と紳士を巧に使いわけた。いつも趣味の良いネクタイをつけ、上質の服を着ていた。人臭いとも思わぬ自信にみちた態度は

まだ許せた。相手の思想なり神經なり、全部わきまえた風な文化人ぶりを、私は嫌惡した。權力というものが、こんな男の形となつて自分たちを支配しているのが、つまらなく、暗く感ぜられた。そのなめらかな辯舌と、大きな笑聲を聴いたあと、唾を吐いても汚いものが後味に残つた。だが終戦後、私はその男の存在を忘れていた。その男のいやらしさも忘れた。いやらしいと言ひ出せば、全部が、自分そのものがいやらしかつた。

彼女の夫はその辛島の下で、印刷技術の仕事をしていた。そして漢口へ派遣された。彼女は上海にひとり残された。部屋を探してあける、と辛島が言つた。約束の日に、部屋を見に彼女は出むいた。辛島は部屋のドアをしめると「私は一目で、あなたが好きになつた」と言ひ、彼女を亂暴に抱きすくめた。

「隣の部屋には、たしかに部下の人が二三人いたはずなんです。あたし、もがいて聲を出したんですけど、誰も來ませんの」

彼女は興奮しながらも巧みに喋つた。時々、奇麗な目で私の表情をうかがつた。それは私の動搖をたしかめているように思われた。私は何氣ない風をした。

「けものみみたいな男ですわ」彼女はきつい目つきをした。それは「男つてみんなそんな者だ」と詰るように見えた。私は「俺に權力があつたら、俺だつて」と思ひかけた。彼女を抱きすくめたのが辛島でなくて、自分であるような錯覺にさえおち入つた。いずれにせよ、彼女は身體を委せたのだ。その後も自殺せず、生きていたのだ。それは事實なのだ。

「それから毎晩でしたわ」私は眼前の肉體を凝視しながら、燒きつくような苦痛をジツとこらえていた。もしかしたら、それは快感であるかも知れなかつた。

辛島は漢口へ命令を出した。そのため夫は終戦まで、漢口にどどまらねばならなかつた。その間、彼女は辛島に所有された。どこに彼女が隠れても、辛島はすぐ自動車でそこへ乗りつけた。近所の人

も夫の友人も、それを知り抜いていた。だが誰もささげり止めなかつた。上海へもどつた時、夫は長江下痢で瘦せ衰えていた。トラックからかき降ろされると、ドツと寝ついたままであつた。辛島はまだ彼女を手ばなさなかつた。金銭物品は豊富にあたえた。そして時々、床についた夫の傍から彼女を呼び出した。

夫はすでに知つていた。彼女を罵つた。彼女は告白し、わびた。夫は辛島のお金で藥は飲みたくないと言つた。しかししはや、寝ている布団も、電燈や水道も、その金なしではすまされなかつた。夫は、自分は友人に見はなされた。輕蔑された、と苦しんだ。彼女がなぐさめると、なおのこと苦しんだ。「お前は憎いが、しかし可哀そうだ」と夫はつぶやくという話だつた。

「主人はまるで子供みたいな、良い人なんですの」

彼女は涙にぬれたハンケチをまるめ、コンパクトで化粧をはじめた。一寸開いた女の唇は、水々しい紅色に染められた。やわらかい頬の肉がのびたり、ちぢんだりしながら、白い粉でおおわれた。彼女は器用に、念入りにそれをすませた。

「それで、現在はもうなんですか。辛島のこと」

「キツパリ別れましたの。あんな男、死ぬまで憎んでやります。戦犯ですもの、もうじきつかまるでしょう」

彼女はそつけない、冷たい表情をした。聴き終つて茶碗を手にすると、何故か私は苦笑に顔がゆがむのを感じた。そして、妙に疑ぐり深い考えばかり湧いた。「この女は本當に辛島を憎んでるだろう。奴に身體をあたえたのは悲劇であるよりは、むしろ快樂だつたのではないか。ズルズルにその關係をつづけた以上、底に金銭以外の欲望があつたかもしれない。楽しく生きたい、楽しくとまでいなくても、満足に生きたい一念で、つらいも、恥ずかしいもなかつたのではないか」

私は自分の身にあてはめても、つらい恥ずかしいの念も忘れて只生存して行こうとする、イヤらしい、憎たらしい人間の本能を、彼

女の身の上に想像することができた。彼女の魅力が私を襲うだけに、わたしはかえつて強くそれを感じた。ムカムカして、悲しくなつた。

「わたし、杉さんを信じてますの。だからつまらない話したんですわ」

彼女は私の茶碗に老酒をついでくれた。

「でもこれ、本當は主人のいいつけなんです。主人は前からの友達に會いたくないらしいんです。杉さんの詩を讀んで、杉さんを信じてるんですわ。だから一度お話ししたいと言つてるんですのよ。お願いですから一度来てやつて下さいませんか？ とても喜びますわ。わたしたち毎日つらいんですもの。明日、来て下さいます？ 早い方がいいんですの。あのひと、この二三日とても悪いんですの」

彼女は私に、明日の來訪を約束させて歸つた。そして今、私は一月も湯につからぬ皮膚に、物干場の埃が舞い上がつてはへばりつくのを氣にしながら、行こうか、行くまいか、と思案しているのだつた。どっちでも良い所だつた。興味は充分にある。しかしいづれにせよ、そのまま放つておいて、すむことであつた。

北四川路のはずれまで行く間、「おじさん、あめ買つて」と少年飴屋に二回せがまれた。酔つてゐる時以外、私はそういう少年が不快だつた。街かどで、外國の浮浪少年に帽子をかつばらわれた日本の男があつた。その男の困つた弱々しい顔つきは、氣の毒というより、やはり不快だつた。二三歩追いかけて止め、そして私の方をチラと見た目つきのたよりなきが、イヤだつた。彼女の住むアパートの前まで來た。印度人の門番が鐵門をあけた。そして私の右腕の日僑腕章をジロリと見た。數軒並んだ洋館のアパート、その三軒目でヨビリンを押した。

階段をかけ降りて來た彼女は極端に嬉しそうだつた。嬉しがられるのは氣持良かった。しかし矛盾してゐるような氣がした。喜び方

が明るすぎて、彼女の語つた日常の暗さに、まるでそぐわなかつた。

三階の扉をあけたところで、靴をぬいだ。次の間に病人がいる氣配がした。病人は寝たまゝ私のあらわれる瞬間を待つてゐるにちがひなかつた。その緊張が私には感ぜられた。病人にとつて、これは重大な會見かも知れなかつた。私にとつては何でもないはずであつた。何でもないので重大がるのを私は輕蔑せねばならなかつた。

「どうぞ」彼女はおそろしく派手な模様の座布団をすすめた。

病人はひどく瘦せていた。布団は平たく低く、中に身體が横たわつていないようだつた。彼ははじめ顔を横にして私を眺めたがすぐ天井を向いた。それと同時に彼の顔には、生まれたての赤ん坊か猿のように、クシャクシャと皺がよつた。泣いてゐるのだつた。泣くまいとするため、首や肩が痛々しく慄えた。額や頬が醜く赤らんだ。

「よく、よく來て、下さい、ました」

泣くため息が苦しいのか、聲を出すのがむずかしかつた。かすれて、又とぎれた。

「ま、待つて、いました」

「はじめ下痢だけだつたんですが、肋膜炎がひどくなつて、水が溜りましてね。心臓が位置をかえてしまつたもんですから」

彼女は齒切れのよい口調で説明した。夫にハンケチをわたしたり、水を飲ませたりする。その一舉一動がひどくキビキビしていた。腕の肉色、ふくらはぎの丸みなど、若々しくめだつた。

「僕は、誰も打ち明ける、友達がないもんで、あなたなら、聽いてもらえる、と、思つて。恥ずかしい話なんで。普通の者には、恥ずかしくて、話せない、事なんで」

私は、激情を盛るにはあまりに弱々しくしなびてしまつた彼の顔を、無理して眺めていた。愉快な見ものではなかつた。だが、それ

私は私に自分が健康で生きていることを想い出させた。優越感と自信さえ、あたえてくれた。

「僕はべつだん能力もないし、あなたの話し相手になれるとも思いませんが、うかがった方がよいと思つて、ぶしつけにお邪魔したんですが」

「ええ、別に、何も、していただかなくて、いいんです。ただ、あなたのような人に、話が、したかつたんです。あんまり、ひとりぼっち、で、苦しかつた、もんだから」

彼は私より、ずつと年が若いらしかつた。目鼻立ちもすぐれていて。澄んだ目が神經的にいらだつて、こちらの考えの先の先まで見てとりそうであつた。一寸した私の表情の變化で、彼の瞳にはおびえた曇りが走つた。その間に狂氣じみた鋭いものが、キラリキラリと光つた。

「こいつはよくこのごろ、死にたい、などと言います。僕は、死にたくないありません。生きたいです。元氣になつたら、やりたいことが、いくらでもありますからね」

「そうですか。それはうらやましいですね。僕にはやりたいことなど何もありませんよ」

「いいえ。氣づかずに、あなたは既にやつているのですよ。僕もやります。戦争中やれなかつたことをやります。やらねば、なりません。僕は今まで、だめでした。だから、今度こそ、やりたいことを、やります。強く、なります。辛島のような男を、滅亡させるような、ことをやります。それができなければ、辛島の倍も倍も、悪い男になつて見えます」

彼は上氣していた。話すために努力していた。しかし、私は、彼がもうすぐ死ぬと思つた。死相は、黄ばんだ肌の上にも、薄くなつた鼻すじにも、色濃く漂つていた。彼が何を喋ろうと、それは實を結ばずにすぐ消えることは、明らかだつた。私は同情はしなかつた。ただ胸苦しかつた。

「今はもう、僕を相手にする者はありません。僕は輕蔑されています。女房を癡取られ、女房のもらつた金で生きています。しかし、これですむはずは、ありません。僕は、屈辱のまま、何一つそれをかき消さずに、土の下に入るのには、イヤです」

彼女は夫の話が自分の身にふれると、美しい眉根をよせ、私を見やつた。

「ひとに嫌われるのは、つらい事ですからね」後はしばらく喋るのを止め、呼吸をととのえた。それから、昨夜見た夢の話をした。

夢の中で、彼は癪病^{癪病}になつた。口からも胸からも、臭氣を發散した。彼の妻はそんな彼を嫌つた。彼を嫌つた妻の顔は、それを見ると彼が發狂しそうなほど、恐怖にみちていた。妻は逃げた。彼は追いかけた。そして妻をとらえた。抱きしめた。すると、たまらない臭氣が口や胸から發散した。それが彼自身わかつた。妻は唾を吐いて、罵つた。罵りながら逃げた。彼は淋しさのあまり大聲をあげた。

「さめて見て、癪病でなくて良かつたと思ひましたね。まだ、ただの病氣で良かつたと思ひましたね。ほんとに安心しましたよ」

「あなた、そんな夢ばかり見るのね」

紅茶の仕度をしながら、彼女はこわばつた顔つきをしていた。笑おうとして笑えないらしかつた。

「わたし、よく辛島の夢見るわ。辛島を殺す夢見るわ」

彼女は何氣なく言つた。だがそれは芝居じみて、うつろにきこえた。私は、それが女らしい嘘だと思つた。夫は暗い目つきをした。そして黙り込んだ。

「僕は、杉さん、本當のことを言ふと」彼は急に高い細い聲で叫んだ。「こいつが信じられないんです。辛島が生きてる間、こいつの言うこと、何一つとして信じられないんです」

彼は又先刻のように泣きはじめた。今度はもう泣くまいとはせず、奇怪な咽喉の音をまぜながら泣いた。それにつれて彼女もすす

り泣きを始めた。

「杉さんの前で、何もそんなこと言わないでもいいじゃありませんか。あんまりひどいわ。あんまりだわ」

「お、お前が、う、嘘を、言うからだ」

「あなたは、私の言うこと、何でも嘘だ嘘だつて言う。それじゃ、わたしだつて、生きて行けないわ」

「生きているじやないか。現に、平氣で、生きて、い、居るじやないか」

彼の泣聲はいかにも病人らしく、きれぎれであつた。彼女の泣き聲は、おしころしていても、若い生命力がほとばしるように思われた。二つの泣聲は、いちどきからみあつたり、別々に離れたりして續いた。

私は昨日もらつた外國煙草を一本つまみ出した。マッチがなかつた。彼女はあわてて上衣のポケットから外國製のマッチを出した。涙で頬をぬらしたまま、間の惡そうに笑つた。

「紅茶、さめちやつたわ。いいわ、お晝に御馳走するわ。杉さんゆつくりしていらして」

「イヤ、今日は僕、失禮する。腹工合が悪くて」

「え？」

彼は泣くのをやめた。私がすぐ歸ると思つてか、サツと表情を變えた。進退きわまつたように、悲しげな眼つきをした。それは私にいきなり殴りつけられたかの如くであつた。

「す、杉さん。イヤでしょう。こんな光景を見るのはイヤでしょうが、どうか、もう少し、もう少しだけ居て下さい。僕たちは誰も、たよりにする者が、ないんですからね。あなた以外には、信頼すべきひとが、誰もいないんですからね」

「僕は、別にイヤじゃありません。ただ僕はね」私は、自分が人から信頼されるのがたまらないのだ、と言いたかつた。だが止めた。それはキザになるからだ。こんな場合、どんなにきまじめに言つた

ところで、結局輕薄になるからだ。第一、私はきまじめになれなかつた。

夫婦は平靜になり、あたり前の會話にもどつた。私は十分ほゞ坐り、そして起ち上がった。

「晝飯は今度御馳走して下さい。實は昨日の晩、ナマの牡蠣^{かき}を食べたもんで、どうも氣持悪くて」

彼はあきらめ、かつ満足していた。そしてやさしい表情を浮べていた。

「また、来て下さいね。待つていますからね」

「ええ、來ますよ。僕は今日来てよかつたと思ひましたよ。頭で考へていたより、あなたの方が好きになつた。たしかに親しみを感じましたよ」

それは事實だつた。彼等は自ら恥じ、眞剣に生きていた。自分たちだけで苦しんでいた。私がそう言つた時、彼の瞳には歡喜の色が燃え上がった。多分それは「歡喜の色」と言うべきなのだろう。そういう單純なものを、私は氷いこと見ていなかつた。彼は思はず瘦せた片手をあげ、私の方にさしのばした。それからおずおずとひつ込めた。

下へ降りる時、彼女もすばやく出て来て、身をすり寄せるようにして一緒に降りた。

「嬉しかつたわ。今日来ていただいたいて」彼女は下の出口で扉をあげる前に、くるりと私の前に來た。

「杉さん、ほんとにわたしたちを棄てないでね。棄てたら恨むわよ。あのひとと恨むし、わたしも恨むわよ」彼女の態度は冗談じみていた。しかし言葉じりに思ひつめた所が有り、輕々しくはなかつた。むしろ暗い、底深いものがあつた。

「杉さん、わたしをイヤな女と思わないでね。守つてちょうだいね。杉さんが力貸してくれたらわたし復活できるのよ」それから彼女は急に聲をひそめた。「あのひと、明日にも死ぬかもしれないの

よ。わかつて？」

私は、彼女の追いつがるような目が熱に燃え、やがてその上に長いまつげがかぶさるのを見た。

鐵門を出ると方々で爆竹の音がした。耳もとても鳴った。明日は舊正月の元旦だった。家々の柱や扉には、赤い紙が貼つてあつた。もうちぎれ、街角の埃に舞つているのもあつた。それは枯葉や紙屑の中に、異様にあざやかに見えた。赤い布でくるんだ赤坊を人力車で運ぶ主婦もいた。それらの赤色は、何か暖かく、又神秘的に見えた。歸る路すがらその祝祭の赤色ばかりが目に入つた。

汚らしいボロの藍衣につつまれた、色黒々とした男女が、坐つたり、歩いたり、かたまつたりしていた。そして何でもない風にめでたい正月を迎えようとしていた。私は彼等が（私や日本人たちと無關係に）みんなして暮しているのを、今はじめて發見したかの如くであつた。

家の裏口を叩くと、主婦が戸をあけてくれ、ニコニコしながら日本酒を一升だしてくれた。保甲事務所から私へのお禮だった。

「杉さん、いいお正月ができるね」と主婦は言つた。

私はびんを下げて部屋へ入つた。日本酒は甘く、とろりとしていた。私は接収工場の明細書を令晩中にしあげなければならなかつた。二百種類もの精密機械の名稱と員數と價格を英語か中國語で書くのであつた。機械のカタログと辭引が箱の上に在つた。これで少なくとも百萬元もらえた。それで百匁三十萬元のネーブルを二百匁買い、それを土産に病人を訪ねよう、と私は決心した。

夕方までに仕事は半分すんだ。酔が出て疲れた。横腹が痛くなリ、指は動かなくなつた。視力はますます弱つた。パン賣りが下の路地に來た。羊かん賣りも來た。みな日本人の俄か行商だった。誰も買わなかつた。

Aが來た。日語新聞で論説を書いてゐる男だった。

「君は文化人俱樂部の會へ何故出ないんだい」

「行きたくないからさ」

「明後日、管理處の文化部が皆を呼んでるんだ。一緒に行かないか」

「行けない。代書がいそがしくて」

私には「文化」という言葉がよそよそしくてならなかつた。Aは人民裁判の話などした。それにも私は興味がなかつた。私は街角で見かけた黄金色のネーブル、艶もなく積まれたネーブルのことばかり思ひうかべていた。

Aが歸ると布團にもぐり込んでウトウトした。風が出たらしい。裏口の戸を叩く音がした。私を訪ねる客である豫感がした。客にわずらわされるのはイヤであつた。女の聲がした。彼女だと思ひ、身うちを吹きぬけて濁り濁つた睡氣を消し去つた。私は布團の上に起きなおつたままでいた。「來たな」私は酔つていた。酔つたまま冷酷になつていた。狂暴にもなりそうであつた。

下の服の透いて見える茶色のレインコートにサワサワ音をさせて彼女は扉をあけた。コートには水玉がポツポツ光つていた。「一寸失禮するわ」彼女は私の寝ていた布團を踏んで、窓の掛金はずし、ソツとあけた。窓の鐵格子が黒々と雨にぬれていた。「よかつた。ついて來なかつたわ」路地のをぞいてから彼女は窓をしめた。「里の前で辛島につかまつたの」杉さんの所へ行くのだと言つたら、一緒に行くというのよ。わたし振り切つて驅け出して來たの」雨に打たれた頬が青白く、疲れていた。

「まだそんな事やつてるのか」

「そうよ、この前來たときも遇つたのよ」

彼女の大ぶりの顔は、いかつく緊張していた。そのため無表情になつた。

「あのひと、わたしのこと忘れられないの。自分でもそう言うのよ。へんね。……今日のお晝の御馳走持つて來てあげた。お酒の肴にして」

「わざわざ持つて来てくれたのか」

「そうよ。是非とも食べさせたかつたんだもの」黒い重箱に入つた中國式の點心を出した。重箱の黒い漆の艶と、こんがり揚げた點心の皮がいかに家庭的に見えた。

「明日お正月ね。明日、又来ようかしら」

私は病人のことにふれなかつた。彼女も指の先ほどもそのことにふれなかつた。

「わたしつて、ずいぶん呑氣でしよう」「そうだね」

「少し頭がへんなのかも知れないわ」「そのきみがあるね」

私はしかし辛島のが氣にかかつていた。それを詳しく聴きたかつた。彼女がいやがつても、私の興味はそこに在つた。

「辛島はやつぱり本氣で君が好きなんだな」

「そうらしいのね」彼女はそれを聴かれたために、イヤだという意地わるい表情をした。「あの偉らぶつた人が、救つてくれなんて言うの。驚いちやつたわ。今になつて、何言つてるんだと思つて。あの人、精神狀態がおかしいのよ。戦犯のことや何かでね」

「そうかな。そんなこと言うの」

「おかしいでしよう。男のくせに」

私はそれが意外だつた。私には厭惡すべき強力者としての辛島の印象しかなかつた。厄介な動物と思ひ、自分と同じ感情を持つ人間として考えたことはなかつた。憎むというより、念頭になかつた。だから彼女の言葉もその場ですなおに受取れなかつた。

「救うも何もないでしよう。だつて、わたしに救えるはずないじゃないの。私だつてひきずり込まれるのイヤよ。終戦と同時にキツパリ別れたんですもの」

彼女のキツパリ別れた、という言葉は不自然にきこえた。彼女はこの前もこの言葉を使つた。それは事實でなくて、彼女のそう有りたい希望であらう、と私は察した。

「辛島は音をあげるような男じゃないだろう。只君が必要なんだ」

「知らないわ、何だか、ともかく怕いのよ。あのひとが生きてる間、わたし安心して睡れないわ」

「そりや、そうだろうな」

「杉さん」彼女は自分の家の入口で別れた時と同じ目つきをした。「あなた、わたしを守つてくれる？ 愛してくれる？ わたしは、あなたを愛してるのよ」

「僕が君を？」私は歡喜の念を湧き上げながらも、返事をこまかしかつた。私にとつてはすべてが耳新しかつた。それにひきかえ、彼女はすつかり用意しているらしく見えた。

「わたし、ほんとに今、生きるか死ぬるかの場合よ。それはわかるでしよう。ね、だから眞劍よ。ごまかさないうで、愛してるなら愛してと言つて頂戴。いいかげんじやすまされないので。だつてわたし本氣で好きなんだもの」

「好きだよ。もちろん君が好きだよ。だけど多分、守れないよ。守ることは多分だめだよ」

「じゃ、愛してるのね」「うん」

「嬉しい。いいわ、愛してさえくれれば。そうね。守るのは無理かも知れないわね。あなたにはね」彼女は邪氣のない笑い方をした。「無精者らしいからね」

「人を守つたことなんか、経験ないもの」

彼女は私の肩につかまり、腰を浮かせて接吻した。彼女の唇は妙に柔らかだつた。唇がはなされそうになつた時、私が今度は彼女の肩に手を回して、かなり強く接吻した。

私は、これらすべてが彼女の豫定の行動だと思つた。自分のかねがね考えぬいた筋がき通り彼女が事を運んでゐるのが、私にはよくわかつた。しかし私はそれが少しも不快でなかつた。してやられたとも感じなかつた。彼女を可愛いと思う念は増しこそすれ減りはしなかつた。

「杉さん、だけどわたしを愛せて？ 辛島のもつた女、愛せて」

彼女は眼をすえ、自分自身の激情で氣味わるく無表情になつた。
 「愛して。おねがいだから可哀そうに思つて。ほんとに、辛島なんか殺されりやいいのよ。今すぐ誰かに殺されてくれりやいいのに」彼女に私にしがみつき頬をすりよせ、かすかにすすり泣きながら、辛島を呪う言葉を口走つた。彼女にはそれが必要らしかつた。私は彼女を抱いたままでいた。そして辛島の容貌を明確に想い浮べた。今や彼は私と無縁の者ではなかつた。彼女を通して私は彼の肉體を感じた。その吐く息の匂いまで感ぜられるほど彼は私に接近してしまつた。

「さつき君は、辛島が僕のところへ来そうにしたと言つたね」

「そう」彼女は暗く、考えぶかげになつた。「わたし辛島はあんなの所へ前から来るつもりだつたと思うの、キツとそうだと思うの」

「あの男が自分で？ 何故」

「何か話したいんでしよう。あんだと」

「だつて、俺は奴をあんまり知らんよ」

「わたしだつて、あんだを知らなかつたじゃないの。でしよう？

辛島はわたしがあんだを頼りにしていること感づいたのよ。死ぬか生きるかの場合でもん。ぐずぐずしてはいられないわ」

「そうかな」

「そうよ。あなた命がけになつたことないの」

「……あるよ。だけど今はちがう。今は命が有るだけだ。命がけはないよ」

「自分でそのつもりでいなくても、命がけになること有るもんよ。ね、あなたは辛島が殺せる？」

「……殺せる。しかし殺したくはないよ」

「辛島は殺されていい人間だと思ふ？」

「……思う。殺されてわるい人間なんて、そう居ないよ」

彼女はうすら笑ひし、さらに暗く考えぶかげになつた。話し方が熱心で無邪氣なのに、暗い考えに沈んで見えるのは、ごく動物的に

ではあるが、彼女が感じぬき、生きぬいているためだと、私は認めた。私は自分たちが、どす黒く、はげしく思われた。

「これ何？ 詩なの」彼女は半紙に書いた「被銃殺者」をとりあげて讀んだ。私にとつて、その詩はもう色あせていた。私は今日傾きくずれた。その私にくらべると、詩はイヤに安定していた。もつと深くしなければならなかつた。

「あなた毎日、何を考へてるの」彼女は惡戯じみた、やさしい笑ひ方をした。「あんだでも考へることある？」

「ない」私は苦笑した。「あなた又わたしのところへ来る？」

私は病人の寢姿を想い出した。彼女がそれを想い出しているのもわかつた。「ネーブルを土産に持つて行くよ」

「そう。待つてるわ」彼女は私の指をギュッと握りしめた。「無理して來なくてもいいのよ。わたしが来るから」

「一度だけは、必ず行く」私は彼女を送つて行くのを止めた。私は今日、もう充分に新しい經驗をした。もうすでに充分すぎていた。

その二

舊正月の二日、私は中國の衛兵に叱られた。酔つていたし、非は私に在つた。自治會へ行く途中、衛兵の立つている場所が一つある。その前で日僑はお辭儀するきまりである。管理處の前とここ、二個所だけ、私はよく通過し、そして頭を下げた。自分一人頭を下げるのは何でもないが私の前に多勢の日僑男女がヒョイヒョイ頭を下げて行く時、或は知人と話しながらつい通りかかつた時は、下げる自分が強烈に意識される。抵抗を感じた。中國の市民で立ち止まつて私たちの辭儀の仕方を眺めている者もいた。多くの場合、衛兵はむずかしい注文もせず、怒鳴り立てもしなかつた。

その朝、私の前を、三十歳ほどのガッシリした日本人が歩いていった。肩を張り、足をふみしめるようにして行く全身に力がこもつていた。背廣姿だが、もと軍人と思われた。彼はわざと悠々と帽子も